

## 2023 年 — 日本藻類学会事務局役員の挨拶



会長  
**小亀 一弘**  
北海道大学大学院理学研究院  
研究対象生物種：海藻類  
研究分野：分類学  
好きな藻類：カヤモノリ（これまで、随分とお世話になってきたので、他の藻類の名前を出しては申し訳ない）

日本藻類学会会長を、昨期より引き続き、2023 年度および 2024 年度も務めさせていただきます。何卒、よろしくお願いいたします。事務局体制については、昨期の幹事にそのまま留任していただき、新幹事を 1 名迎えました。また、今年度は、和文誌「藻類」編集長が、芹澤如比古氏から岩滝光儀氏へ交代となります。英文誌「Phycological Research」につきましても、交代の予定でしたが、西原グレゴリー氏と瀧下清貴氏に 1 年留年していただき、今年度も続けていただけます。評議員会は、

今年度と来年度は選挙で選ばれた新しい組織となります。

本学会は、皆様のご協力のおかげで、概ね順調に事業が行われておりますが、今期に取り組みたいこととして、電子メールによる会員への連絡体制の確立を考えております。現在も、電子メールでのお知らせの送付を承諾していただいた会員には、学会からの連絡に加え、講演会や公募等のお知らせも電子メールでお送りしていますが、そのための電子メールアドレス登録数は会員数の半分に達していません。会員全員が電子メール登録を行えば、会員全員へのお知らせを電子メールで行えたり、会長・評議員選挙をオンラインで行うことができるようになり、事務局・会員にメリットが大きいと考えています。そのため、まずは、電子メールアドレス登録数を増やしていきたいと考えていますので、ご理解とご協力をいただけますと幸いです。

この 2 年間で振り返りますと、新型コロナウイルスのパンデミックで大変な世の中でした。春から行動制限はほぼなくなるようですが、症状が重かったり、後遺症が残ることもあるようですので、感染には気をつけながらお過ごしください。



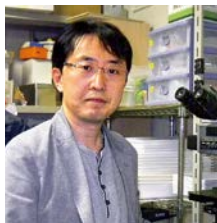
庶務幹事  
**阿部 剛史**  
北海道大学総合博物館  
研究対象生物種：海藻（ソゾ）  
研究分野：分類学、ケモタクソノミー  
好きな藻類：ヒラクサ。いまは *Ptilophora* のシノニムになっていますが *Beckerella* の語感が好きです。

体調不良でいろいろとご迷惑をおかけして申し訳ありません…



庶務幹事  
**仲田 崇志**  
北海道大学大学院理学研究院  
研究対象生物種：微細緑藻類  
研究分野：系統分類学  
好きな藻類：*Stephanosphaera* はカッコいいですね！

今年から庶務幹事（無印）を担当させていただきます。以前に（広報）は担当したことがありますが、（無印）は初めてなのでご迷惑をおかけしないよう頑張ります。（今回は無印の庶務幹事が 2 人ということで、例年より楽ができるといいな、とか思ったり思わなかったり）



庶務幹事（国内会員事務担当）  
**山岸 幸正**  
福山大学生命工学部海洋生物科学科  
研究対象生物種：海藻  
研究分野：系統分類学  
好きな藻類：ネバリモやウミゾウメンのような柔らかい海藻には何だか惹かれます。

国内会員担当として 3 年目となり、引き続き入退会、会員情報の管理、会費納入などに関する業務を担当させていただきます。定期的に地元瀬戸内海の海岸に出かけ、さまざまな海藻種の姿に触れていると、気分がリフレッシュされます。



庶務幹事（外国会員事務担当）  
**栗原 暁**  
九州大学大学院農学研究院  
研究対象生物種：大型藻類全般  
研究分野：系統分類、保全生態  
好きな藻類：多様性に富んでいる紅藻が面白い。寄生紅藻の研究を真面目にやりたい。

引き続き、海外会員の会員更新手続き、会費納入手続き、英文誌投稿論文の超過ページ請求、Wiley への英文誌発送手続きなどを扱います。所属先が国内から海外へ変更になる際はご一報ください。よろしくお願いいたします。



庶務幹事（広報担当）

吉川 伸哉

福井県立大学海洋生物資源学部

研究対象生物種：褐藻，パルマ藻

研究分野：植物生理学

好きな藻類：ハネモ

引き続き、広報担当として学会 HP の管理・運営を担当することになりました。学会からの情報発信が滞らないように頑張ります。



会計幹事

四ツ倉 典滋

北海道大学北方生物圏フィールド科学センター

研究対象生物種：コンブ類

研究分野：多様性，保全，育種

好きな藻類：北海道のコンブ（川汲尾札部のマコンブ，  
忍路のホソメコンブ，追直のエンドウコンブ，など）

前期はこれまでにない状況のなかで、手探りで業務に当たってきました。さまざま貴重な経験をすることができ、サポートをしていただいた多くの皆様に感謝申し上げます。今期も役員間のチームワークを大切に、健全な学会運営に努めてまいりますので、引き続きよろしくお願ひ致します。



## アオミドロ語誌（4）： アオミドロの語源は「あをみどり」

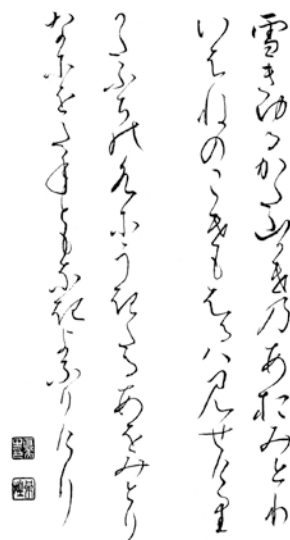
仲田 崇志

アオミドロの語は江戸時代に登場したが（前号『語誌（2）』参照），『本草綱目啓蒙』（小野蘭山，1803–1806 刊，17 巻 1 丁裏）には「一名アヲミドリ」とある。アオミドリはアオミドロの古い形で、鎌倉時代から用例がある。

藤原定家（1162–1241）の和歌に「あ於みと利」とあり（『拾遺愚草』1233 頃成立，自筆本上巻 39 丁裏；図右），これが一説にアオミドロとされた（『大言海』）。おそらく陸生藻や地衣を指したものだだろうが，色名とする解釈もある（久保田 2017. 藤原定家全歌集 上，p. 71）。

より確実な例は藤原光俊（1203–1276）の和歌（『新撰六帖題和歌』第 5 帖，1244 頃成立，穂久邇文庫本 77 丁裏；図左）で（『日本国語大辞典 2 版』），「ミツニウキタルアヲミトリ」とある。この歌は緑色を題材に詠まれたため，元々は色の名だったアオミドリが，淀みに浮く藻類や水草を指すようになったと推測される。後の『日葡辞書』（1603 刊）にも，「Auomidori」が川の藻や陸生の藻・苔などを指したことが記されている（土井ら 1980. 邦訳日葡辞書，p. 40）。

おそらく江戸時代より前，アオミドリは青緑色の藻類を広く指し，江戸時代中頃までにアオミドロに転訛した。そして陟厘に同定されたことによって（『語誌（3）』参照），意味が糸状藻に限定されたのかもしれない。



アオミドリが登場する和歌（仲田梅煌書）。右，藤原定家作。『拾遺愚草』自筆本上巻 39 丁裏に基づく。「雪きゆるか多山可遣乃あ於みと利／い者ねのこ遣も者る八見せ个里」（雪消ゆるの片山陰の青緑 岩根の苔も春は見せけり）。左，藤原光俊作。『新撰六帖題和歌』永青文庫幽齋奥書本を，他の写本を参考に改変。「可多ふち能水尔う起多るあをみとり／な丹を多年とも奈起よ奈り介り」（片淵の水に浮きたる青緑 何を種ともなき世なりけり）。幽齋奥書本では「水耳佐き多る」（水に咲きたる）となっている。